京都府立医科大学附属図書館のトータルシステム化

五十嵐 一郎*

京都府立医科大学附属図書館

I. はじめに

平成4年4月、本学附属図書館（以下、図書館）は広小路キャンパス（旧立命館大学跡地）に建設された新館に移転し、5月8日から新館での歩みを始めた。これは病院内に書籍室が開設されてから102年、旧図書館の竣工からは63年、大学の創立からは120年目に当たる。

新館の開館準備に当たり、これまで諸先輩が積み上げてきたものを大切に引き継ぐと共に、目前に迫った21世紀にも十分対応できる図書館づくりを合い言葉に、とくにコンピュータのトータルシステム化を最重点課題として取り組んだ。

図書館では、昭和59年より創立110周年記念事業の寄付金を基に寄贈されたオフコンで貸出・返却を中心とする一部の業務を行っていたので、新館開館に当たり新しい機種が導入されるとは考えていたが、財政サイドはこれまでの機種に少々容量をアップさせたものでお茶を濁そうとしているようであり、これにどのように対応するかが大きな課題であった。

京都府には、本学図書館のほかに、府立大学の図書館、府議会の図書館、府立図書館、府立総合資料館と五つの図書館があるが、寄贈物とはいえコンピュータが導入されているのは本学だけという現状では、図書館サイドの危惧も当然のことといえた。とくにコンピュータの優劣こそがこれか

らの医科系図書館の生命線と訴え続け、なんとか満足できる機種を導入することができた。

私は平成2年6月の人事異動で、それまで出向していた宇治市の図書館から本学に変わり、コンピュータの導入に関わってきたので、その経過の概略を述べる。

II. 大学事務局の理解を得るために

昭和54年から始まった大学整備計画の一環として新館建設が話題になりだしたのは、図書館運営協議会の記録によると昭和56年からで、昭和60年頃からは盛んに議論されている。本格的に動きだしたのは昭和63年からで、大学整備担当主幹、建設・設備担当の施設課、図書館とが建設作業に取り組み、私が来た時にはハード面（建設、設備）はほぼ固まり、予算措置も終わっていた。残るは新図書館に必要な諸物品、コンピュータシステム、人員体制等のソフト面の充実であった。

ソフト面の準備に取り組み始めた平成2年度の人員体制は、新館準備のために嘱託職員2名（週31時間勤務）が増員され職員5名、嘱託4名となったが、うち嘱託1名は夜間開館用務だったので実質8名で、図書館の平常業務をこなしながら準備作業をしなければならず、職員には残業残業の毎日を強いることになった。

まず第一に取り組むべき課題は平成3年度の当初予算に新館開館に必要な予算を計上し、予算を獲得することだったので、元年度に私の前任者を中心にまとめていた仮予算（案）を精査し、コン

* Ichiro IGARASHI : 〒602 京都市上京区広小路通河原町西入。

(1993年5月10日 受理)

ピュータ担当, 備品担当, AV機器担当等の業務ごとに担当者を決め, ミーティングを重ねた。

それらをふまえて事務局の担当者と折衝するのだが, どうも意見がかみあわず, 心を合わせられない状況に当惑することが多かった。そうこうするうちに事務局の不満は, 新館開館が間近に迫っているのにどのような図書館にしようとしているのか, 運営目標はなんなのかの説明もなく, ただ厳しい要求だけはしてくる, 事務局サイドの思惑も考えないで, 図書館はいったい何を考えているのだ, といったことであることに気付き, 急速この不満解消に取り組むこととなった。

事務局の理解を得るために, 医学図書館のありかたを論じた論文を読み, 職員と議論しながら, 私なりの医学図書館像をつくり, 四つのサービス目標と五つの運営方針から成るパンフレットを作成した。初めての医学図書館勤務からくる知識不足と経験不足, 時間的にじっくり勉強している間がなかった等を理由に, 医学図書館界の諸先輩の論文から利用できることを最大限利用させていただいた。

このパンフレットを基にして, 庶務課長・係長, 経理課長・係長等関係者一同に集まってもらい, 2回にわたってどのような図書館をつくらうとしているか, とくにコンピュータの必要性をしつこく説き・議論し, 一定の理解を得ることができた。この後, 何をすることもことがスムーズに運ぶようになった。

図書館の職員は真面目で熱心なのだが, 他部局の職員と接触する機会が少なく, 図書館内だけの発想に終始し, 協調性に欠ける傾向があると考えられるが, 図書館建設のような他部局を巻き込んだ仕事の場合に, それがマイナス要因になるのではないか。常日頃から他部局との横の連携に努め, 図書館の重要性を認めさせる努力を怠ってはいけない。図書館は頑張っているという実態を知らせ, 常に事務局の目が図書館に向けられていることが,

図書館を発展させていく重要なポイントであろう。事実これ以降, 図書館職員も積極的に事務局職員に働きかけるようになり, 事務局の態度も好意的になり, わからないことや失敗にも好意的な助けを受けることとなった。ここに大学を挙げて21世紀にも対応できる図書館づくりに取り組む体制ができあがったのである。

III. コンピュータシステム関係予算の要求

予算要求の仕方としては, どこかの業者にそれなりの見積書を提出させ, それを基に要求し, 予算決定後に機種選定作業を行っていくのが行政ルールに則ったやり方であるが, 開館までの日数から逆算すると3年度に入ってから機種選定, システム構築では間に合わないと考え, 予算要求書に提示のシステムを導入機種にしようとした。時間的制約のため, 事務局への口頭による内諾を得て, 国内の3業者にしぼり, それぞれ個別に招き, 思いつく限りの条件を盛り込んだ質問書への回答を求めると共に, 各業者と話し合いを重ねて検討し, 図書館職員の希望機種をしぼりこんだ。

さすがに3業者とも日本を代表する業者だけのことはあり, 優劣がつけがたかったが, たまたま日立では4年度に発売予定の新パッケージ(VOSK版LOOKS/U)を開発中で, 雑誌処理のパッケージに本学の要求事項を最大限取り入れると提示してきた。これが決め手となって日立の中小型汎用コンピュータを導入機種とし, 予算要求をしながらシステムを検討することとなった。このやり方が3年度に入り大学内の担当者の異動とも重なり機種選定ルールの無視として否定され, その対応に苦慮することとなる。

IV. 予算要求と折衝

コンピュータシステム導入関係予算として, ①

日立HITAC/M-630/20Eと端末機18台 ②学術情報センターとの接続費 ③花園分室（本学の教養課程はかなり離れた花園地区にあり，そこに図書館の分室がある）とのオンライン接続 ④各教室との公衆回線による接続工事費 ⑤単行書の遡及入力費 ⑥メドライン，医学中央雑誌等のCD-ROM等の導入費等を要求項目とし，全力を挙げて予算折衝を行った。先のパンフレットを基にした話し合いが威力を発揮し，厳しい折衝ではあったが，理解してもらえた。

とくに，遡及入力については予算措置されれば，現実問題として作業ができるかの不安を抱きつつも新館開館という熱気に煽られ，10万冊の単行書を入力すれば全てコンピュータ検索できるメリットをあげづらい押しまくった。

V. 予算措置

3年度当初予算の結果は，花園分室とのオンライン接続は見送られ，端末機の数台は11台に削られたが，その他についてはほぼ要求どおりの措置であった。ただし開館が平成4年4月以降のため，実際の予算措置は4年度の当初予算でとの約束であった。

遡及入力は3年度と4年度の2年計画で実施することとなり，3年度内に5万冊の入力をせざる得ないことになり，業者への発注準備，業者の選定，校正等に忙殺され，コンピュータ担当者はシステムのつめと遡及入力作業を同時にこなさなければならない状態で，残業に次ぐ残業，日曜，祝日もない毎日になった。これによく耐えてくれた。期限内に5万冊の遡及入力を終えたのである。

VI. 機種選定の正式決定

予算も確定し，コンピュータ以外の予算もまずまず，また3年度に開館直前の年ということで開

館準備を名目として京都府の新規採用職員1人の増員を受け，開館に向けて具体的活動を始めた矢先，事務局から正式のコンピュータ機種決定の手続きを経て，学長決済を得ているか。本学の決定手順は本庁の職員を含めた「機種選定委員会」を組織し，対象業者もトータルシステム化に応えられるなら，どの業者にも声をかけ，「選定委員会」で協議して，最終的に委員の投票で決めなければならないと教えられた。2年度の後半から日立に対して雑誌システムを中心としたパッケージに対する要望を繰り返しており，今さら白紙に戻せない状況になっていた。

事務局とは種種やりとりをしたが，最終的には大学の決定手順を踏むしかないとの結論になり，事務局のアドバイスを受けながら，「機種選定委員会」は図書館運営協議会委員を中心にして，これに本学の庶務課長と経理課長が加わり，さらに病院部門の電算化に詳しい教授1人をアドバイザーとして構成し，前年図書館が機種選定した時に作成した資料を手直して，「選定委員会」提出資料とし，2回の「検討会」の後，投票で日立と正式決定した。その後学長決済を得て，正式に機種が決定した。

機種決定の際，急がば回れで，正規の手続きを踏んでいれば，問題も起こらず，時間も無駄にしないで済んだものと深く反省した。もし投票の結果，日立以外に決まっていたらと思うと今でもゾッとする。

VII. トータルシステム化の歩み

その後，平成3年12月，開館準備のために日立がコンピュータ本体，端末機2台，プリンター1台を旧図書館に設置し，LOOKS/Uのテスト，これまで使ってきた三菱のオフコンのデータコンバートのプログラムの開発など，移転に必要な具体的作業が始まった。

年度が変わった5月7日に竣工式、その翌日から図書館業務を開始したが、当初は閲覧システムと単行書システム程度しか使えなかったが、4年の中旬に雑誌処理システムが完成、各種帳票類も年度末には全てほぼ完成した。

また4年度分5万冊の週及入力もほとんど仕上げる事ができた。

VIII. 導入システムの特徴

図書館のシステムは日立が平成4年からリリースした新LOOKS/U (OSはVOSK) というパッケージであり、資料の受入・発注、利用者管理、貸出・返却、所在調査等等、他の図書館で行っている業務処理はもちろんできる。

しかしシステム導入に際し、雑誌情報の利用形態や雑誌システムの便利さと共に、業務処理の効率化・省力化も強く意図してきた。とくに、雑誌処理方法には最大限考慮してきたつもりであり、ほぼ全般にわたる業務をコンピュータ化するメリットを最大限に活用しようと心掛けた。システムの特徴は次のとおりである。

①閲覧システムとしては、手作業処理との併用を避けるため新着雑誌に、受入時にバーコードラベルを添付することにより、貸出・返却・統計を全てコンピュータで処理できるようになった。こ

写真1. 事務室の端末機

写真2. 1回生へのOPACの指導

の機能はパッケージの中に取り込んでもらった。

②単行書のシステムでは、目録処理をすれば、配架ラベル、新着図書案内、教室当分の図書引渡簿、図書原簿、書名・著者名・分類目録、ブックカードラベルなど必要な帳票がほぼ全て打ち出される。

③雑誌のシステムとしては、システム構築にあたり、いろいろな要求をし、ほぼ実現された。とくに、中小規模大学図書館用パッケージとして、他のパッケージと異なる点は、先に述べた新着受入雑誌の資料ID管理ができることと製本雑誌の場合、ページデータを入力できることである。

その他、補修用のバーコードを必要のつど作成できるのも特徴といえる。

以上のようなことが、新しいコンピュータの導入で実現できるようになったので、重複する事務作業を減らし、また利用者にも喜んでもらえるようなシステムを提供できるようになったと考えている。

IX. 今後の課題

導入システムの機能を徹底的に使いこなす職員の技能向上はもちろんのことであるが、今後は以下のことに留意し、その達成に努力していく。

ハードウェア構成

ソフトウェア構成

図1. 図書館専用電算機システム

①花園分室へのコンピュータ導入とオンライン化

②学内LAN設置を求め、学内全施設からのコンピュータ接続

③京都府内医療関係団体とのコンピュータ接続

④導入システムに満足することなく、絶えずコンピュータの発達動向に注目し、追求する姿勢

X. おわりに

新館開館後1年が経過し、この1年間の最も大きな課題であった遡及入力も終わった。あとは教

室からの保管転換資料のうち受入未整理分の整理等、まだいくつかの作業を残している。これらについては優先順位をつけ、プロジェクトチームにより着実に処理しなければならない。

しかし最盛期の頃の戦場を思わせる雰囲気はなくなった。寂しい気もする。これからは利用者サービスの向上を合い言葉に、利用者から信頼される図書館づくりを目指さなければならない。それにしても囑託を含む全職員はよく激務に耐えて頑張ってくれた。このような職員がいる限り、必ずや利用者から信頼される図書館づくりができるであろう。